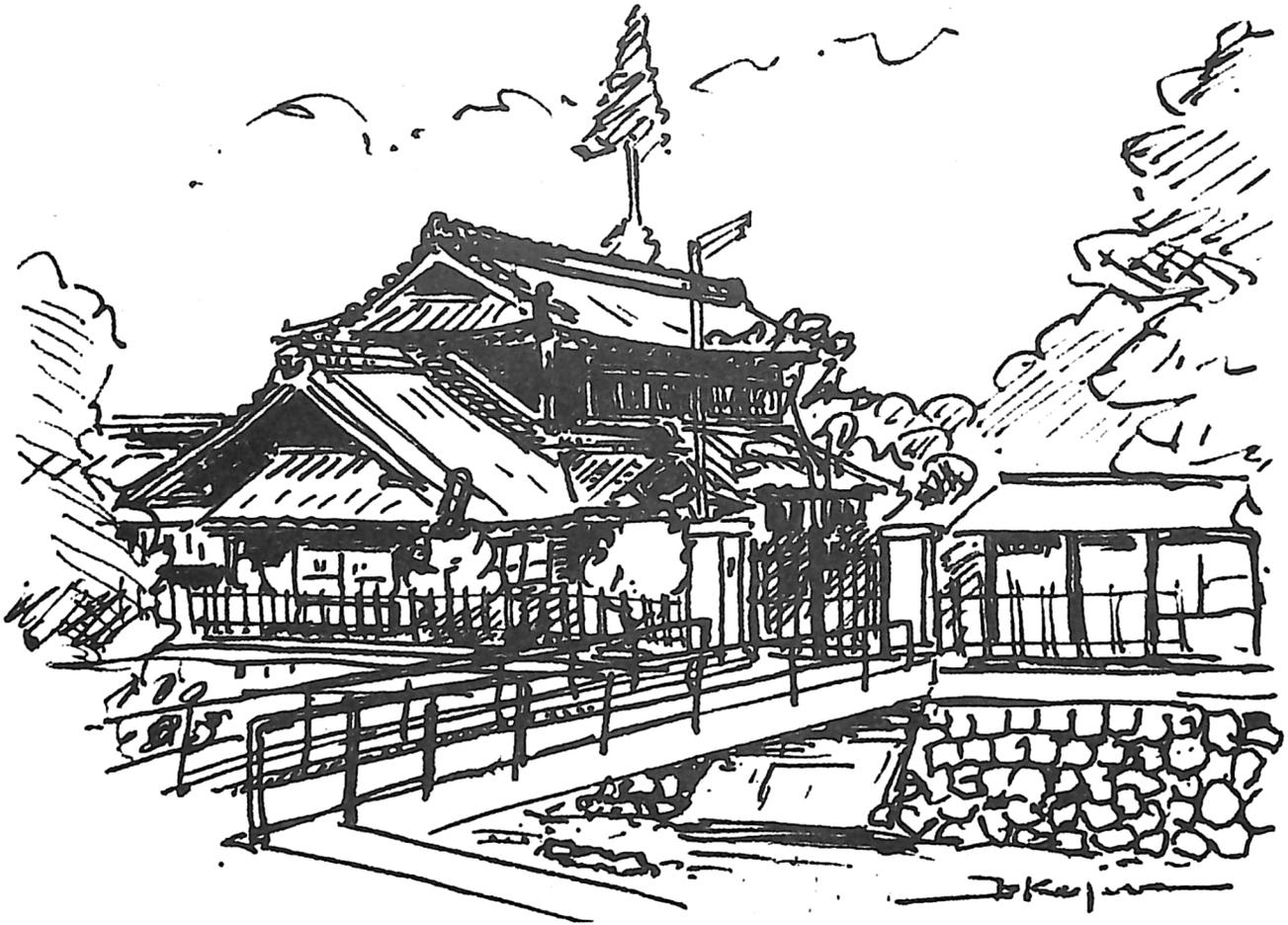


(社)日本技術士会 近畿支部

# まなま ぶだより

No62号  
2001-12-15



長年住みなれた我が家のスケッチですが、近々新しい家に建て替える予定です。  
これは30号の油絵になっていますが、原画としてスケッチしたものです。

小嶋房夫 (経営工学)

奇遇は人と人がミクロの確率で出会うことである。私は最近二度奇遇を経験した。最初は十一月東京駅内の雑踏でもうすぐ大阪へ帰ろうとしていて、宇都宮に住むはずの甥を見つけた時のことである。折角なので一言情報を交換したりした。

さらに昨日神戸大学を初めて尋ね、広大なキャンパスでやっと目的の講演会場を尋ね当てた時、学内でたった一人の知人大学院研究生筒泉技術士が目の前に現われたのには驚いた。これも折角なので資料配布を助けていただいたりした。

これらの奇遇が起る確率は1/1万か1/100万か、あるいはもっとはるかに小さいかもしれないが算定はとてできない。

実務上わたしは調査、研究、立案、規格、設計、製造、試験、分析、培養、検査のどの部分についてもミクロの確率で起るような事象を全く体験したことがない。定型的に起るべきことのみを追求して止まなかったのである。

高等の技術の保持者であるはずの技術士のひとりとして、ふと不安がよぎる。この世の常として、奇跡的に物事は起きつづけているに違いない。仙人ならぬ身では、ミクロの確率で起っている事象を捉える力が足りない。

今回たまたま奇遇を体験してみると、この世は規格、規定、精度、理論、熟練、経験などで武装している積もりでも、それらの圏外で起る事象が存在すると考えると全く歯が立たないと思いはじめ。それは、神秘、魔力、神通力、オカルトといったまやかしのことではなくて動く事象が厳然としてあるから。

危機管理の分野ではどうか？ バイオの世界では？ 天文や宇宙では？

身近な自分自身の交通事故の発生でも、大切な機器、設備、施設の損壊でも超常現象(?)はありうるということになる。一問を提出する。どういう方策で迫ればよいのであろうか。教えを乞いたい。  
(加藤 薫記)

目 次

|                                    |              |       |
|------------------------------------|--------------|-------|
| 巻頭言：ミクロの確率                         | 加藤 薫（農業）     | 2     |
| 平成13年度第2回支部長会議報告                   | 加藤 薫（農業）     | 3     |
| 平成13年度第4回理事会報告                     | 西川 昭二（電機・電子） | 4～5   |
| 技術士継続教育（CPD）とその記録について              | 福岡 悟（建設）     | 6～10  |
| 日本の若者の理科嫌い                         | 長 惇夫（化学）     | 11    |
| BFS（牛海綿状脳症）問題発生の社会的影響と<br>国の対策について | 藤間 能三（建設）    | 12～14 |
| 繊維技術物語（第12話：先染と後染【その1】）            | 谷本 義雄（繊維）    | 15    |
| 私の旅だより アジア・ベトナム                    | 鎮 美香         | 16～18 |
| 部会報告および予告                          |              | 19～26 |
| 防災研究会、建設部会、電気・電子部会、化学部会            |              |       |
| 食品部会、中国研究部会、繊維技術士センター、関西情報技術士会     |              |       |
| 編集委員会からのお知らせ                       |              | 27    |
| 編集後記・広告                            |              | 28    |